



催眠支配3

～愚かな傀儡～

ミルキーホームズ達を軽くあしらう怪盗アルサーヌ。
怪盗帝国の首領にして、世界を謎で包もうと画策する女傑だ。

謎多き彼女だが、毎日の日課があることを知る者はいなかった。



ただ一人を除いては。
しかしその一人はアルセーナではない。
彼女自身も知らない。日課が存在するのだ。



「今日も至宝を奪いにいかないぞ……」

突然虚ろな表情になった彼女が呟き、向かった先は古びた家。そこにはフアビオという男が住んでいた。

彼は催眠暗示のトイズを持ち、どんな相手でも操ることができると言っていた。

偶然ミルクキーホームズとの戦いを目撃した彼は、トイズを使ってアルセーヌを催眠状態にし、わずかな時間で暗示を埋め込んでいたのだ。



家に入ると意識が覚醒したアルサー又は、暗示の通りに行動する。

「アナタのオチンポから出る至高の精液。それを奪いに来たわ」

「おやおや、これは困った」

「今日はもう射精しちゃったんだよねえ」



「あらぞりゃなの？どきまだ出るはずよ」

「ぞりゃあちよっどは出るけどお、普通のやり方では無理だと思っつよお」

「なら教えなさい。どうすればあなたの精液を搾り取れるのかを」

「そうだなあ。

たぶん尻穴を舐めながら手コキしてくれたら射精できると思っつなあ」

「なんだ、そんな簡単なことなの」



「いいわ、さっしおぼるからそいつに回つて言になっつてお尻を出しなれ」

「ふひひっ！さっすが怪盗アルセーヌ、アナル舐めもできちゅうんだねえ」

「当たり前よ」

尻を舐めるといふ低俗な行為も、至高の精液を得る為ならなんのためらいも無くするじやがでいね。

怪盗であるなら当たり前。そう彼女は思っつてゐるのだ。



ファビオが四つん這いになると
アルセーヌが尻穴を舐め始める。

同時に両手で干しタオルをいびきながら、
舌をねっぺりと動かしていく。





「いっせー」

「ドッ...」

「れろま〜...ぶ〜...」

「あふっ♡」

このお尻……なんて美味しいお尻なの

気をしっかり持たないと私がイッてしまいそう

しっ

しっ

いつのまにか夢中になって尻を舐めて
いると、ファビオは射精が近くなる。



ファビオのチンポから、
精液がたくさん射精される。

しゅんぱっ
しゅんぱっ

アルセーヌの想定よりも多くの精液が、
床に飛び散って付着した。





「ふふ♥たくせん出せるんじやない」

「あんな攻め方されたら出ちゃうよま〜」

「これで至高の精液は私のモノ〜ね♥」

「舐めるのよ」

「んんんん」

「んん」

「床に這いつくばって無様に舐めると、至高の精液を得る価値がある」

「わっ、おっ、舐めておれよ、おれよ、おれよ」

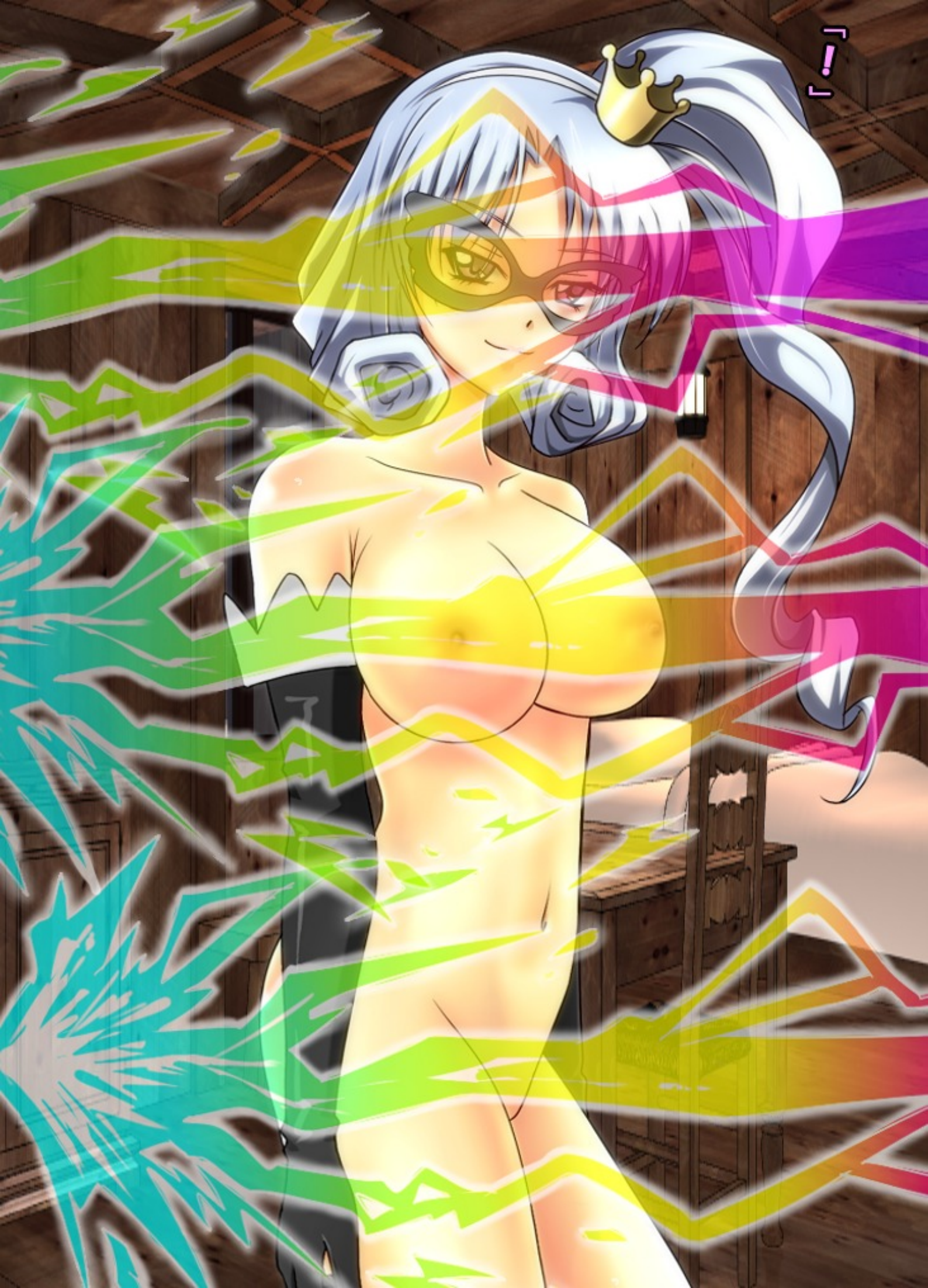
「そう言っているとアルセーヌは土下座の状態になり、舌を突き出して、ぺちぺち、ささや、床を舐めはじめた。」

「ふう♥まさか本当にこれほど美味しいとは思わなかったわ」
「どげどげさま♥また来るから覚悟しておきなさい」

床の精液を綺麗に舐め取ったアルセーヌは、
勝ち誇った笑みを浮かべてそう言うとそのまま出ていってしまいました。

（トイズ発動！）





ファビオがトイスを発動すると、
一瞬にしてアルセーヌの瞳から光が笑われ、
その場に立ち尽くしてしまふ。

「ふひひっ！」

「さっきはあまりにドヤ顔でゲーメンの土下座舐めを
見せられたもんだから、笑いを堪えるので必死だったよあ！」



「くふふー！ププー！」

「ごーれ、ぞれじゃあ次のステッフに行いっかなあ、」



ファビオは催眠状態のアルセーヌの新たな暗示を与えた。
そして今日ここで起きたことを全て夢だと思わせ、
彼女を意識が覚醒しないまま家に帰す。

服を着替えて眠るように設定し、翌朝起きると全て夢だと思っ寸法だ。

「……アッ！」

翌朝、目が覚めたマルセーナは自己嫌悪に陥っていた。

この私が無様に土下座を晒して……床の精液を舐めるなんて！
悍ましい！……クッ！



最悪の夢。

にもかかわららず不思議と嫌じゃないと思っつこまっどらなやじ、
本人も気付いてそれがまた腹立たしい。

ありえないわっ！
私がそんなことを望むだなんて……

ありえない！

振り払うように頭を動かして、マルセーヌはなんとか夢を止めたつもりでした。



「わいお」

翌日、アルセーヌは準備を済ませて家を出ようとしていた。
そんな時、不意に時計が鳴る。

ぴんぴんぴんぴん

あれ？

目覚ましなんてかけた覚えは……



「……」

かけたはずの無い目覚ましが鳴ると、
アルセイアは力が抜け人形状態になってしまっ

何も考えられない、無機質な人形だ。

目覚ましは鳴りやむと、部屋の扉が開く。



入ってきたのはあの男、ファビオだった。

「しっかり人形になったみたいだねえ。」

アルセーヌを人形状態にしたのは当然ファビオだった。トイスによる暗示で時間が来るとこうなるようにしていたのだが、ただ人形にしただけでは足りない。

人形は人形でも感覚を残したままでの人形化だ。



「キミが人形になっている間にこのドスケベボディはしっかりと可愛がってあげるからねえ」

「ふひひっ！ボク好みのオマンコにしてあげるし、ついでに快感も蓄積しておいてあげちゃうよぉ！」

感覚を残し、人形状態で得た快感を蓄積するようにしていたファミオは、その快感をある条件で解放するように設定していた。意識の無い彼女を犯し、快感だけを蓄積した状態で素に戻る。その上でさらに弄ぼうと言っただけだ。



犯すのに必要なだけ服をはぎ取ったファビオは、
ドミンツと人形アルセーヌをベッドに突き倒した。

ドサツと倒れたアルセーヌはまさに等身大のラブドールになった。

「それじゃあサクツと挿入しちゃうわねー！」

「ふひひっ」



「おほおっ！」

「これはこれは……
ふひひっ！ さすがは怪盗アルセーヌ」

「すんごい締めだねえ！」



ズ
ズ
ズ

きつく密着しながらピストンを繰り返していき、
柔らかなオマンコの肉を蹂躞していき。

千シポから伝わるアルセーヌの肉圧は
まさに処女のそれと、強く下半身が
締めつけられるような圧を感じた。



ズチユ
ズチユ

「最高のオマンコを使わせてもらって、
だ、快感だけはちゃんど蓄積して
おいてあげるねえ」

快感だけを蓄積していくようにしてある
アルセーヌ人形だが、処女では強烈な
快感を与えることは難しい。

ズチュ
ズチュ



だが小さい快感でもそれを全て上乘せ
まして蓄積すれば、強烈な快感と同等以上
まで持つていくことは可能だ。

「うっ、おはいんじゅれは……ふひひっ！」

「ボクも長くは……持たないかもあっ」



ズキ
ズキ

わがままに溢れてきた愛液を感じながら
深いのストロリクで前後させる。
それが膣の奥から入り口までを亀頭で
扱くことになり彼女に快感を与えた。

その刺激の強さはファビオも長く堪えら
れるものではなく、数分のうちに射精に達してしまっ



ズチュ
ズチュ

「あ………あ………あ………」

亀頭から爆発的にザーメンが放出され、アルセーヌのオマンコを満たした。





「……」

「ぶっ〜…いぢあ気持ち良かったなあ〜」

スツキリしたファビオは、アルセーヌの記憶と認識を改竄する。
目が覚めれば自分が家に帰ってきたところで、疲れでうたた寝を
してしまっただのたと思うようにした。

そしてファビオが視界から消えると服を着てから目を覚ますようにして、
家を出た。



目を覚ましたアルセーヌはすぐに自分の異変に気付く。
アソコから精液がドブドブと溢れてくるのだから当然だ。

……ま、気にする必要はないわね。

誰かに知らないうちに精液を膣内に注がれていたとしても、
最悪妊娠するだけだわ。



精液の存在に気付くことはできても、
理由付けされて気にならないようにされていたのだ。

自分が帰ってきたところだと思っている彼女は、
着替えるためにまずはアイマスクを外そうとする。

顔からアイマスクが外れたその瞬間だった。





「ひゃああああっ♡♡♡」

「んう♡な、なにこれっ♡♡」

「あくっ♡か、からだがっ!?!」

ピクピク

アイマスクを外した瞬間、
蓄積された快感を一度に感じてしまっようじにされていいたアルサーヌは、
そのあまりの快感に膝をガクガクさせてイッてしてしまう。

「くはっ♡イッたのじっ♡」

「あああっ♡♡」

ビクッ
ビクッ
ビクッ

「も、もうイッたのじっ♡あああまっ♡♡」



一度イクだけではその快感を処理しきれない体は連続で何度も絶頂する。
合計8回もの絶頂を連続して一度に味わった彼女は、
そのまま床に倒れ込んで失神してしまおう。

目が覚めると、すぐにこの出来事に動揺するものの、一瞬で冷静さを取り戻すことになった。

自分の異変に気付くことはできるが、眼鏡を外すと蓄積された快感が一気に押し寄せるのは普通の「じゃだっ」と思っているのだ。いつものまに蓄積されたのかだ。問題はその快感が、



だが、その問題は彼女の中ですぐ解決した。
マスクをした状態では自分がイクことはできないという認識になった。
そしてマスクをした状態で長時間オナニーしてから家を出た。
という事を思い出したことで、彼女の中で辻褄があつたのだ。

私といたいが……うっからうっから……



自己嫌悪になりながら、その日は休むことになっていたアルセーナ。
そんな彼女の心には、熱い思いが燃えたくぎっていた。

明日いよいよ……絶対に成功させしめさせるぞ……！



「今まででは手や胸、口を使って失敗した……」

「だから今日は直接オマンコで精液を搾取してあげるわ！」

「おお……怖いねえ」

翌日、ファビオのところで記憶を改竄されたアルサーヌがリベンジに来た。これまでには精液を搾り取るのに何度も失敗していて、もう自分の性器を使うしかないかと覚悟を決めてきている。

そんなアルサーヌはファビオを逃がさない為、強引に押し倒して彼に跨った。



んんっ……♡

「ふ、ふふっ。入ったわ、これでもう迷がさないわよ」

「くひっ！騎乗位は初めてだけど凄いやぁ……！」

ズズッ

「あらっ？セックスしたことであるのね」

初めて同士ならこちらが有利かと思っただけで、経験があるなら油断できないわね。

アルサーヌとのセックスで騎乗位は初めてだという意味で
言ったのだが、彼女の認識ではこれが初めてとの性行為。
挿入で破瓜が無いことや、何の抵抗もなくチンポがすんなりと
受け入れられることへの疑問も抱くことなく、精液搾取という名の初体験が始まる。

「んっ♡んんっ♡な、なかなか良いわねっ♡」

「ぞうでしよう？セックス気持ちいいでしょ〜」

ズクン ズクン



「ちょ、調子に乗らないっ♡」

既にファビオのチンポで開発され、このチンポしかしないオマンコ。アルセーヌが感じてしまうのも無理はない。

強気を保ってはいいても明らかに体は快感を得ていて、彼女が腰を落とすたびにカリの刺激でビクビク震える。

「くふっ♡んっ♡んんっ♡」

「ほら、もっとキツくもっと激しく動かさないとお、ボクより先にイッちゃうよお？」

ズキッ
ズキッ

「くっ！？あっ♡くっ……！」

「おほっ♡キツくなった」

「あっ♡あっ♡」

ギョツと締めつけたことで自分の快感も増した
アルセーヌは、なんとか自分より先にファビオを
イかせようと必死に腰を振った。

ズクン ズクン

「ああ！も、もう出ちゃうよお〜」

「だ、出しなさいっ♡あなたの精液をっ♡私のなかじっ♡」

「あ、あああ〜〜〜！」

「〜〜ツツ♡♡♡」

ズクン ズクン

「フフ、こんなになんかおもしろい……♡」



ああ♡なんて凄い精液なの……♡
これが至高の精液……♡

体に入っているだけで快感が湧き上がって……♡
気を強く持たないと今にもイッてしまいそう♡

至高の精液を手にしたアルサー又は、恍惚とした表情で満足そうだ。目的を果たした彼女は去ろうとするが、快感を堪えながらアソコをキゅッと締めている状態では素早く動くことができない。

そんな彼女の手をファビオは掴み、そのままベッドへと押し倒した。



女は男に押し倒されると本能的に力が抜け抵抗できなくなってしまう。

そんな認識を与えられ、実際に力が抜けるように暗示をかけられ、でいる彼女は、どうすることもできない。

既にグチュグチュにされてしまったオマンコは精液と愛液が潤滑油になり、チンポをすんなりと受け入れてしまう。





「あっ♡う、動かしたうっ♡」

「精液こぼれても大丈夫だよあ、
また射精してあげるからさあ」

「……！」

||
p
||
p
||
p
||

精液が手に入るなら犯されたとしても
それはそれで良いと思いたい、アルセーヌは
抵抗を諦める。





イだが快感は我慢しなければならぬ。女に近づくと逃げなければいけぬ。ただ彼女に近づくと逃げなければならぬ。

p
!
p
!
p
!
p
!

くっ♡……んっ♡

チンポでイカされてしまった女怪盗は、
イッた回数だけ言うことを聞かなくては
いけないのが決まり。

それは古来より全ての女怪盗達が
守り続けてきた絶対の掟。





だから絶対にイクことだけは避けなければ
いけないのだ。耐えられる自身もあった。
アセ又没有には、絶頂するほどには
快感はあっても、絶頂するほどには
体が高まらないからた。



不思議とこれ以上感じたらイクという
ところまで快感が増えず、ある一定の
ところまで抑えられてる。
アルセーヌ又は自分の精神力の強さで
抑えているのたと思ってるが
実は違う。

／pー
／pー
／pー
／pー
／pー
／pー



「ふひひっ！ぞろぞろマイマスクを
はずしちゃおーかなー」

くっ
っ



そうだった！
アイマスクがあるから絶頂しないんだわ！

ま、まずい！
今外されたらチンポでイカされたこと……！！

p
!!
p
!!



なんとか抵抗しようとするが、
体の自由は効かない。
どうするできない彼女のアイマスクを、
フアピオは無情にも外してしまっ。

ピッ
パッ



快感が放出された途端に連続で
絶頂してしまっ。体が痙攣し、オマンコの
ビビビと体が激しくねり動いて
ヒビビと締め付ける。良さに、
千ポタを締める。精子に、
千のポタを締め付ける。良さに、
そのあまも続けて射精した。

ピクピク
ピクピク

ファビオは女怪盗の掟を知っている。
そう確信したアルセーヌは、もう命令を聞かざる負えないと観念し、
正直に告白した。

「……2回よ」

「ふひひっ！ぞっかあ、じゃあ2回命令できまっちゃうんだねえ」



「何をさせようっていらつらつ？」

「そうだなあ……じゃあまず「個目は、お掃除フェラしてもらおうかな」


「……お口で綺麗にすればいいのかしら？」

「正解。綺麗になったら2個目の命令するからねえ」

「……わかったわ」

精液と自分の愛液にまみれた千んポをしゃぶるのはもちろん嫌だったが、既にセックスで乱れた後なのでフェラ千才程度の命令で済んで良かったとむしろホックとしていた。





そう思いながらお掃除フェラをじているアルサーヌだが、
その考えは甘かった。2つ目の命令はこの場でできることではなかった。
一度彼女は帰ることになった。記憶や精神状態を調整して、
ファビオはアルサーヌの記憶や精神状態を調整して、
命令だけはしっかり遂行するようにした彼女が次に現れるのを待った。

「……」

「ふひひっ！待ってたよお」



アルセーヌは再びファビオの家に来ていた。
やってきた彼女は、家の中で自動的に人形状態に変わる。

そんな彼女の体には以前には無かったものが刻まれていた。

「いいねえいいねえ！」

「どこのタトゥー屋で入れたのか知らないけど、
恥ずかしかっただろうなあ」



アルセーヌの股間にはタトゥーが刻まれていた。
それはファビオが彼女を自分のモノにする証だった。
彼がした2つ目の命令はこのタトゥーを入れてくることだったのだ。

「ふひひっ！それじゃあ準備も出来たことだし、今日はキミを完全に支配してあげるからねえ」

「まずはその体にいっぱい快感を刻んであげる」

「その後でイキまくってもらおうよあ」

人形状態のアルセーヌをベッドに寝かせるぞ、そのまま意識を戻すことなく挿入した。





挿入して30分が経った。
既にセックスの体には何
度もイテクいか
わかんないほどの快感が蓄積して
イマスキを外せば即絶頂するた
ろうか？



射精してしまわないように休み休み
ピストンしていてもこれで以上我慢が
難しくなってきたので、そろそろ意識を
戻してやることにした。



「なっー?」

「えっ!?!あっ♡」

「ど、これは?」

「んんっ♡あ、あっ♡」



状況を理解できな
いまま、
アイマスクは取ら
れてしまっ
た。

「あっ！」

その瞬間……





わけもわからず何度も絶頂する体に、
アルセーヌはイクことじがでまなかつた。
連続絶頂は完全に思考を奪い、
最後には彼女を失神させてしまう。

「はあ………!はあ………!」

「ふひひっ、さっき自分が何回イッたか教えてたかなあ?」

「ぞ、そんなの無理よ……」



「だよねえ、少なくとも20回はイッてたもんねえ」

「……に、20回も命令するつもり……!?」

「いやあ、ボクもそんなに命令を思いつかないし、今回は特別に3つだけがいいよ」

「な、何をすればいいの……？」

「なあに、簡単なことだよ。」

「よく聞いてわかったらちゃんと復唱してから実行してね」



アルセー又はそれを復唱するまで時間がかかった。
理由は簡単、それはあまりにも受け入れ難い命令だったからだ。
だが拒否するわけにはいかない。

しばらくの葛藤を経て彼女は諦め、復唱するに至ったのだ。

「私……怪盗アルセーヌは……」

「ファビオ様に絶対の服従を誓う牝奴隷となることを……受入れ……ます」

「そして、全身全霊をかけてファビオ様を愛します……」

「その上でこれまで通り……
アルセーヌ、そしてアンリエットとして振る舞い続けます」

「これら3つの御命令を……遂行します……」

「本来は教え切れぬほどの命令をされるべき立場で……
3つに御容赦いただき……ありがとうございます……」



「物分りがよくて助かるよお」

「それじゃ、改めてボクの牝奴隷としてよろしくねえ！」

「……はい、御主人様」



こうして、アルサー又は牝奴隷になることを誓い、愛を持ってファビオに尽くす生活が始まった。最初は苦痛な日々だったが、それもすぐに慣れた。

全身全霊を持って愛を持つと努力した結果、彼女は自分の心を自ら完全に塗り替え、本当の愛を持つに至ったのだ。

「あ、アルセーヌが逃げた!？」

戦闘中やどんなに重要な要件の最中であっても、呼び出しがあれば即座に駆けつける。

隷属後、アルセーヌにとってファビオの要求が全てに優先されるようになったからだ。





「あぁ……♡」
「お尻と精液の匂い♡」

「御主人様の……」
「お尻と精液の匂い♡」

「あぁ……♡」

「あぁ……♡」

「あぁ……♡」

呼び出されたアルセーヌは、
フアビオの尻を舐めさせられていた。

それ以外特に用件は無く、
ただそれだけの為に呼びつけられたのだ。



「ごめんねえ、忙しいのに尻舐めだけさせに呼びつけちゃってえ」

「いえ、御主人様にお呼びいただけで嬉しいのですし幸せです♡」

「いい心がけだねえ」

「当然のことです♡」

「ボクも寝て体力が回復してるし、御褒美に今から種付してあげるよお」

「本当ですかっ♡」



「ああ♡で、御主人様あっ♡」

「おちんぽがっ♡
私の子宮をノックしてえ♡」

「んあっ♡ああんっ♡」

「孕め孕めって……言ってますっ♡」





「ふっひひ！
アルセーヌとボクの子供は
それは優秀な子になりそうだねえ」

「ああっ♡子供っ♡育てますっ♡♡」

「どうせ孕むならちゃんど女の子を
孕むんだよお!ふひひ!」

「はっ♡女の子っ♡孕みますっ♡
おっ♡女の子っ♡孕みますっ♡」

「ですから御主人様の子種でっ♡
私の子宮っ♡満たしてくださいっ♡」



大量に子種を注がれたアルセーヌは、
この時のセックスで受精し、
願いの通りに女の子を孕んだ。

出産したアルセーヌは、娘とともに
父のしもべとして尽くし続けた。

